

令和5年度 授業改善実践研究校報告書 鈴張小学校

1 学校の課題

本校児童の全国学力・学習状況テストの正答率は、国・市の平均よりかなり低く、学力が十分に定着できていない児童が多い。

また、本校で実施している学習アンケートによると、「学習することは好きですか？」の質問に対しての否定的な回答が、昨年度5年生が33%、6年生では55%だった。児童へ聞き取り調査を行うと、「分からないのに、考えることはしんどい。」「家庭学習でも、自主学習ではなく、先生の決めたことをする方が楽だ。」と答えることから、学習意欲が低いこと、学習に対して受け身の児童が多いことが分かった。

音楽科の学習においても、昨年度末に行ったアンケートによると、音楽づくりの活動において、「友達やグループとの活動を楽しんでいるか」の肯定的回答が87%と高かったことに対し、「積極的に考えを出したり音で試したりと試行錯誤している」と回答した児童は52%と低く、さらに、音楽科の学習の中で頑張っていることとして、「いろいろなアイデアや方法を考える」「自分らしさを発揮する」を選んだ児童は、全体の約30%程度にとどまった。

これらの結果から、本校の児童は学力や学習意欲、自己肯定感の低さや自分の感じ方や考え方によさを感じ、思いや意図をもって表現することに対し、苦手意識が高いことが分かった。

2 研究主題

音楽的な見方・考え方を働かせながら、生き生きと学び合う子供の育成
～ICTを効果的に活用した「音楽づくり」の授業づくりを中心に～

3 取組内容

今年度は、音楽づくりの活動において、主に(ア)「音遊びや即興的に表現する」活動について、研究を進めた。

(1) 教師の音楽科授業力向上のためのワークショップ型の研修及びミニ研修の実施

- ① ワークショップ型研修
 - ・ 手拍子回しや簡単なリズムづくりなど、教師のための音楽づくり研修
- ② ミニ研修
 - ・ 夏期休暇中の職員朝会時での、常時活動に活用できる音楽ゲームの研修(別添 資料①参照)
- ③ アピールタイム(模擬授業)
 - ・ 公開授業で扱う音楽づくりを児童の立場で研修



(2) 〔共通事項〕を意識した音楽朝会の実施(別添 資料②参照)

年間を通して、音楽づくりの活動の基礎的な知識・技能として習得することをねらった。また「音楽を形づくっている要素」を偏りなく扱えるよう曲を選定し、指導のねらいを厳選した。

- ・ めあてや注意事項を記載した楽譜の配付
- ・ 担任が学級で指導する際に活用しやすい、歌詞と音源を一体化させた動画の作成

(3) 子供たちの音楽的な見方・考え方を働かせ、資質・能力の育成を目指した授業研究

① 題材計画及び授業づくり

音楽科の授業研究を実施するにあたり、題材計画を考えるプロセスを以下のように整理した。

「何ができるようになるか」 「何を学ぶか」		「どのように学ぶか」	
① 指導のねらいの 明確化	②理想とする児童の姿と 実際の児童の実態	③指導計画	④手立ての工夫
○ 学習指導要領で学年の目標及び内容を確認する。 ※ A表現(3)の(ア)・(イ)の違いや学年の系統性を確認する。	○ 何を身に付けさせたいか、児童の具体的なゴールの姿を想定する。 ○ 現在の児童の実態を把握する。 ※ 資質・能力の視点から実態を見つめる。	○ [共通事項]をもとに、本題材・教材は、どの「音楽を形づくっている要素」が関わっているか捉える。 ○ どの[共通事項]が思考・判断のよりどころとなるか、児童の実態から検討し、焦点化する(絞る)。 ※ 45分の授業だけでなく、題材のまとまりで考える。	○ ねらいを達成するために、どのような活動・場の設定をすればよいかを考える。 <div style="border: 1px solid #0070c0; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> ・課題の提示 ・学習形態 ・ICTの効果的な活用 ・常時活動 など </div>

また、以下の点を意識して、授業づくりを行った。

- ・ 教科書教材による音楽づくりの活動を選定し、付けたい力を明確にすること
- ・ 児童の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を焦点化すること
- ・ 児童が主体的に学習に向かうことができるよう、音や音楽で試す場面において、条件の設定や板書、声かけ等を工夫すること

② 題材や本時の学びにつながる常時活動の研究

単なる「音楽遊び」ではなく、より効果的に本題材や本時の学びにつなげるための常時活動を設定した。(別添 資料③参照)

③ 全学年、「音楽づくり」の学習指導案作成及び授業公開

音楽づくりの活動の中でも、主に(ア)「音遊びや即興的に表現する」活動における、音遊びや即興的に表現することを通して音楽づくりの様々な発想を得る力の育成(思考力・判断力・表現力等)を中心に、全学年が授業公開(校内授業研究 5本、公開授業研究 1本)を実施した。

- | | |
|-----|---------------------------------------|
| 題材名 | 1年 「ねこのなきごえで あそぼう」
(公開研究会授業 別添④参照) |
| | 2年 「おまつりの音楽をつくろう」 |
| | 3年 「チャチャチャのリズムで遊ぼう」 |
| | 4年 「早口言葉でラップを楽しもう！」 |
| | 5年 「沖縄の音楽をつくろう！」 |
| | 6年 「役割を決めて音階をもとにした音楽をつくろう」 |



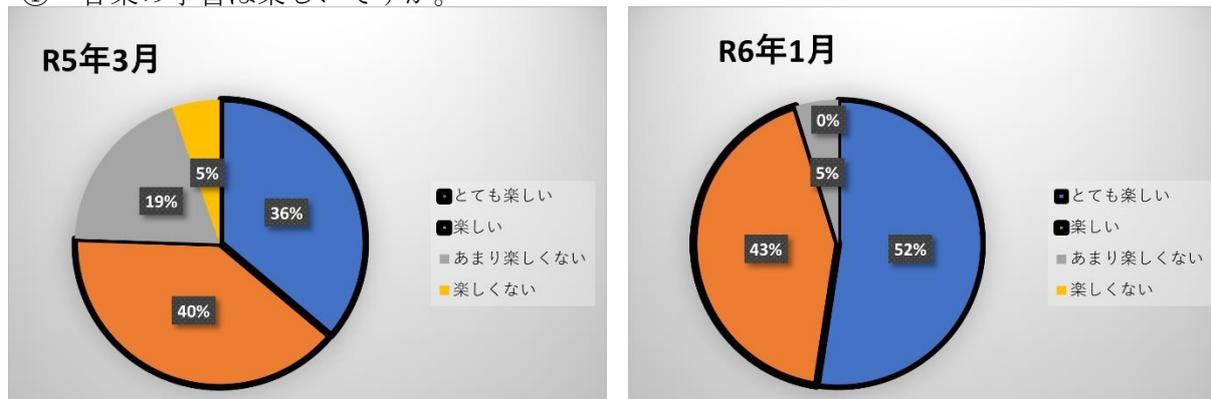
(4) ICTを活用した「音楽づくり」と「学び合い」

- ・ オクリンクや classroom、音楽アプリの活用
- ・ タブレット端末での動画撮影と振り返り

4 検証結果

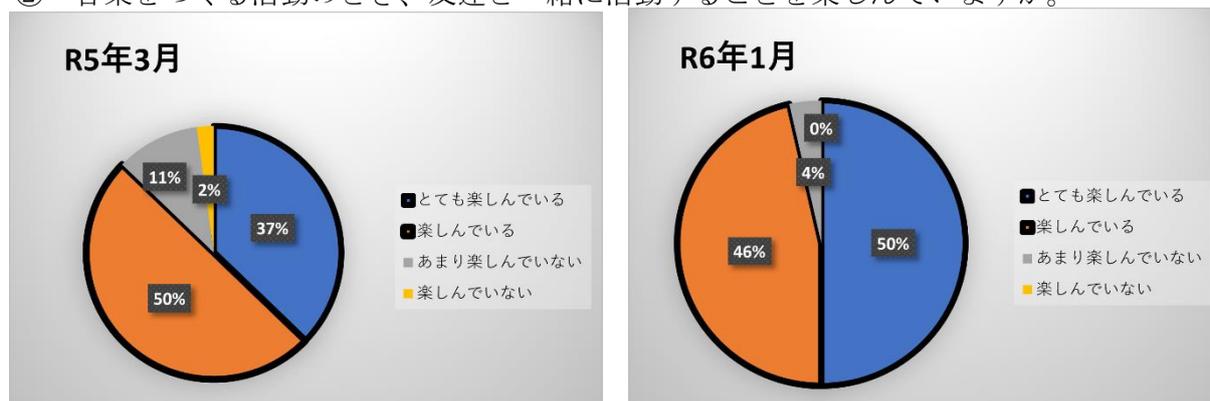
1 児童の学習アンケートより (全児童対象)

① 音楽の学習は楽しいですか。



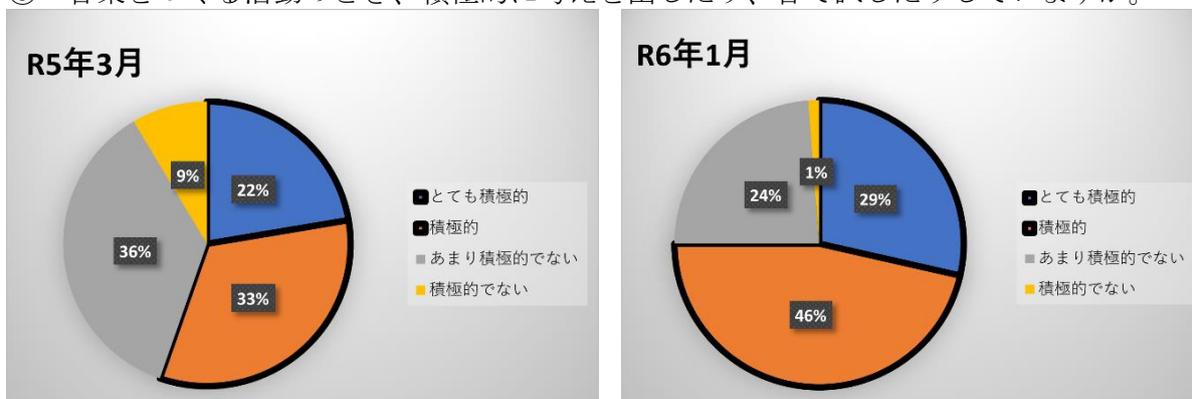
○ 肯定的評価が昨年度末76%なのに対して、今年度1月は95%と19%増加した。また、各学年において、研究授業後に実施したアンケートでは、全学年肯定的評価が100%であった。児童は「先生の伝え方が分かりやすく、先生が楽しくしているから」「知らない曲を聴いたり、初めて使う楽器を演奏出来たり楽しかったから」と振り返った。

② 音楽をつくる活動のとき、友達と一緒に活動することを楽しんでいますか。



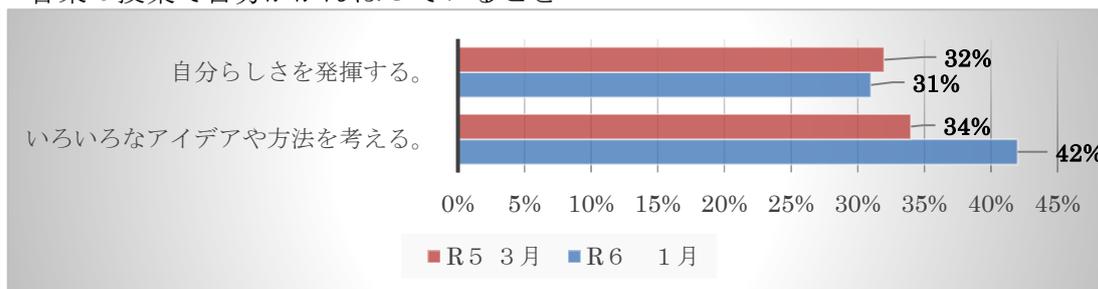
○ 肯定的評価は、87%から96%と9%増加した。また、「とても楽しんでいる」と回答した割合が13%増加した。授業後、児童は「先生や友達と音楽をつくったり、演奏したりするのが楽しかった」「友達と話しながらする方がとてもいい音楽ができるから(楽しい)」と感想をもっていた。

③ 音楽をつくる活動のとき、積極的に考えを出したり、音で試したりしていますか。



○ 肯定的評価が55%から75%へ20%増加した。「積極的でない」児童は9%から1%と8%減少した。肯定的に回答した理由として、児童は「自分の考えを友達が音楽にしてくれているから」「自分の考えを認めてほしいから」と記述していた。

④ 音楽の授業で自分がかんばっていること



○ 「自分らしさを発揮する」の項目については、大幅な改善が見られなかった。

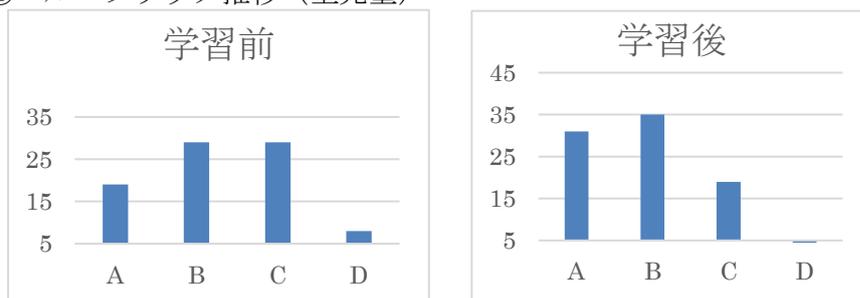
2 ルーブリック評価より

① ルーブリック指標 (例) : 低学年 題材名「ねこのなきごえで あそぼう」

IV	音楽的活動を楽しみ、いろいろな声で表現することに興味をもち、繰り返し音で確かめながら生き生きと音楽づくりに取り組んでいる。
III	音楽的活動を楽しみ、いろいろな声で表現することに興味をもち、生き生きと音楽づくりに取り組んでいる。
II	音楽的活動を楽しみながら、音楽づくりをしている。
I	音楽的活動を楽しもうとしているが、十分ではない。

※ 下線部は、題材におけるねらいに沿って変更する。

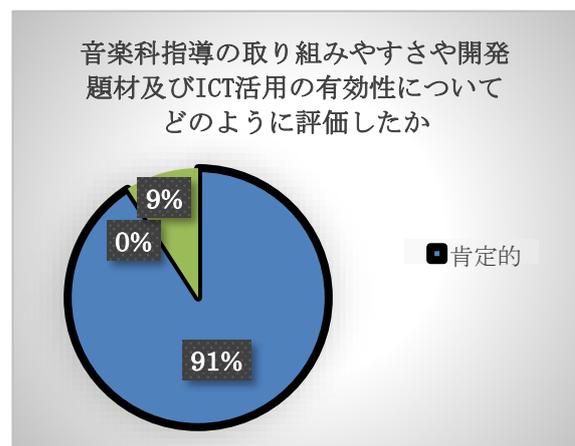
② ルーブリック推移 (全児童)



○ ルーブリック評価では、42%の肯定的な変化が見られ、「A：音楽的活動を楽しみながら、音で確かめたり試行錯誤を繰り返したりして生き生きと音楽づくりに取り組んでいる」に該当する項目は、1.6倍増加した。また、音楽活動に取り組んでいなかった児童は0人となった。実際の授業の中で「音楽的活動を楽しもうとしているが十分に音楽づくりをすることができない」と想定していた児童は、技能的な難しさを友達との関わり合いの中で克服し、音楽づくりを楽しむことができていた。さらに、友達と音を出しながら試行錯誤する中で、音の重なりや縦と横の関係などの音楽を形づくっている要素を、思考・判断のよりどころとし、それらをもとに発想を得ることの面白さに気づき、生き生きと音楽づくりをする児童の姿も見られた。

3 教職員アンケートより

○ 教職員全員が、本研究について肯定的に評価した。教職員アンケートの自由記述からは、「研修や授業研究を重ねることで、音楽づくりの活動への苦手意識がなくなった」「ICTを活用することで様々な音楽の楽しみ方を知り、実践につなげることができた」「教師自らが楽しみながら、児童の目線に立って授業づくりすることができた」、「音楽科だけでなく、他教科でもICTの活用ができるようになった」とあった。



5 研究成果

○ 成果

アンケート結果から、音楽づくりの活動を始めた音楽科の授業を肯定的に捉え、音楽的活動を楽しんでいる児童や、音で確かめたり試行錯誤を繰り返したりして学ぶ児童が増えたことが分かった。

その要因として、声の表現の幅を広げる歌遊びや様々な種類のリズム打ちゲーム、友達と音を合わせたりずらしたりして演奏する活動など、本題材や本時の学習につながる常時活動を意図的に位置付けることで、児童が楽しみながら基礎的な技能を習得することができ、自信をもって学習に取り組むことにつながったと考える。

また、題材のねらいを達成するために、児童の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を焦点化した題材計画を立てたことで、児童は、何をよりどころとして音楽づくりの発想を得ればよいのか分かりやすくなり、音楽の活動量が増加したためだと考えられる。

児童が見通しをもって学習に取り組めるための手立てとして、教師の範奏を動画撮影して児童に示したり、児童とやり取りしながら作り方の例を示したりしたことや、自分に合った学び方を選択することができるよう、音楽づくりで扱う楽器をタブレットやリコーダー、鍵盤楽器から選択できる学習環境を整えたりしたことも、成果の一つと考える。

○ 課題

常時活動を意図的に位置付けることで、音楽づくりに必要な基礎的な知識・技能を習得させることができたが、鑑賞や他の音楽活動でも、それらの知識・技能を児童が活用できるよう、継続的に実践に取り組む必要がある。教師も、それを生かした鑑賞や他の音楽づくりなどの学習につなげられるよう、意識して授業実践を行う必要がある。

また、常時活動や音楽づくりの活動での発想を得る場面において、試行錯誤しながら自分らしさを発揮したり、学習に向かう姿が知識及び技能の習得などに結び付いたりしている姿を教師が見取り、価値付けて広げる必要がある。そのためには、授業者が育成を目指す資質・能力が発揮されている児童の多様な姿をより具体的に想定することが必要である。

○ 今後に向けて

今年度研究を進める中で、どのような力を付けたいのか、目指す姿を具体的に想定することの重要性を改めて感じた。来年度は、今年度の課題の改善となるよう、研究のあり方を模索したい。また、これらに加え、6年間を見通した常時活動の開発や実践、児童が身に付けた知識・技能を活用し、思いや意図をもった音楽づくりとなるような授業改善について、引き続き取り組みたい。

さらに本校で長年続けてきた学び合いと担任が授業研究することを生かし、教科等横断的な視点をもった題材計画の立案や積極的な ICT 活用を行い、音楽科以外の授業等の授業改善につながる研究を目指したい。